関西大学『社会学部紀要』第18巻第1号，1986，pp.31-64　　ISSN 0287-6817

社会・政治的態度の基本的三次元モデル
——疎外・アノミー・適応の因子分析的研究——

辻　岡　美　延・東　　正　訓

Basic Three Dimensional Model of Socio-Political Attitude : A factor analitic study of alienation, anomie and adaptation

Bien Tsujioka and Masanori Higashi

Abstract

The correlation matrix among 200 questionnaire items along 5-point rating scale administered to Japanese university students(N=288) was analysed by principal component analysis to get more homogeneous hexis scales of socio-political attitude.

Socio-political opinion items were composed according to the previous sociological researches upon alienation, anomie and adaptation towards relationships between an individual and society.

Twenty-four hexis scales were constructed and the correlation matrix of those hexis scales was factor-analysed by principal factor analysis with estimated communalities through iterations followed by Varimax, Promax and Rotoplot rotations. Six oblique primary factors were obtained and interpreted in terms of both primary factor-patterns of 24 hexis scales and also of those of 200 item scores derived from extension factor analysis.

Six primary factor scales(12-15 items in each) : Evaluation, Alienation, Participation, Heteronomy, Social Integration and Adaptation were constructed by the principle of factor-trueness proposed by Cattell and Tsujioka using a Fortran program written by Shimizu.

Second-order factor analysis of the primary factor correlations indicates the meaningful structure of basic three dimensions in socio-political attitude interpreted by the key concepts of Evaluation(Optimism V.S. Pessimism), Internal Control V.S. External Control(proposed by Rotter) and also of Adaptation.

Key words : social attitude, political attitude, alienation, anomie, questionnaire, internal control, factor analysis, extension factor analysis, factor-trueness, item analysis

抄　録

社会・政治的態度の等質的な習性水準尺度を得るために288名の男女日本人大学生に施行された5段階の評定尺度による200項目の意見項目の項目間相関行列が主成分分析によって分析された。意見項目は個人と社会の関係に関する従来の疎外やアノミー適応などの社会学的研究に従って収集されたものである。

24個の習性水準尺度が構成され，それらの習性水準尺度間の相関行列が共通性の繰り返し推定法によって因子分析され，続いてVarimax回転，Promax回転，さらにRotoplot回転により回転された。6個の斜交因子が得られ，解釈は24個の習性水準尺度の因子パタンと延長因子分析によって得られた200項目の因子パタンの二つによって行なわれた。

6個の一次因子尺度(それぞれ12～15個)として，評価，疎外，参加，他律性，社会的統合，適合の尺度がキャッテルと辻岡の因子的真実性の原理による項目分析によって，清水のフォートランプログラムを用いて構成された。

一次因子間相関行列の2次因子分析の結果は，評価(楽観 — 悲観)，内的統制 — 外的統制(Rotterの提案による)，適応という中核概念によって解釈される社会・政治的態度の基本的三次元による有意味な構造を示している。

キーワード：社会的態度，政治的態度，疎外，アノミー，質問紙法，内的統制，因子分析，延長因子分析，因子的真実性，項目分析

[問　　題]

社会的存在としての人間は，誰しも，『社会』とよぶ，特定化したり，直接的に把握することの困難な対象に対して何らかの関係態度を持っている。その態度次元は社会的人間にとって一般的，かつ，根源的なものであるがゆえに，この態度次元に，操作的定義（operational definition）を与えることは，『個と社会の関係』を把握し，人間の社会性（sociality）を明らかにする上で極めて重要であると考えられる。

この『社会』に対する個人の関係態度は，決して社会とは独立して形成されるものではない。明らかに，この態度は個と社会の相互関係において成立したものである。すなわち，その関係態度は，心理学的対象である主体側の特質によって規定されているだけではなく，客体側の『社会』の特質によっても規定されていると考えられる。そこで，この態度次元の機能と構造を実証的に明らかにすることは，主体側の法則性のみならず，個人の主観を成り立たせる『客体』としての種々の社会の作用をそこに観察しうる点で重要であると考えられる。

本研究の目的は，『個と社会の関係』を明らかにするために，個々の人間が客体化（objectivation）し，外化（externalization）し，さらには内在化（internalization）する，『社会』に対する，一般的でかつ根源的な個人の関係感情，関係意図，関係認知を，社会・政治的態度（socio-political attitude）として把え，その態度次元の機能と構造を因子分析的手法により操作的に示すことである。

さて，本研究で設定した「社会」や「社会状況」に対する個人の関係態度，すなわち，社会・政治的態度の対象は，従来の社会的態度の対象（性，人種，共産主義，天皇制など）のように，比較的，直接的把握のしやすい社会・政治的事象ではない。われわれの設定した社会・政治的態度の対象は，生活者によって認知され，一般化された『社会』乃至『社会状況』であると考えられる。

また，Allport（1935）は態度（attitude）を「経験を通じて組織化された心的・神経的な準備状態であり，個人が関係する全ての対象や状況に対する個人の反応に直接的，あるいは力動的な影響を及ぼすものである」と定義しており，この彼の定義によれば，本研究の社会・政治的態度は，『社会』という状況そのものが対象となる態度といえよう。

さて，以上のように設定された『社会』，『社会状況』に対する関係態度と関連する研究として，

① Thurstone や Eysenck らに始まる伝統的な社会的態度間構造研究や，認知・感情・行動意図などの態度内成分を考究する Krech, Cruchfield & Ballachey(1962)，Rosenberg & Hovland（1960）らに始まる諸研究

② 哲学者や社会学者らによって行われてきた，「疎外（alienation）」及び「アノミー（anomie）に関する研究などが挙げられる。しかし，本研究でとくに「疎外」「アノミー」を取り挙げた理由

は，心理面にあらわれる疎外（主観的疎外）のうちの疎外態度が『社会』に対する個人の関係態度の中心概念であると考えたからである。またとくにこの領域は，主に社会学者の関心事でありながら，操作的なメスが入れられていない領域でもあるからである。

例えば，「社会の矛盾は個人の力では変えられない」というような社会から疎外されているとする態度は，個人と社会との対立関係において生じたものであり，個人と社会の関係状態に対する態度表明であると考えられる。さらに，この場合の態度対象は，不可視で特定化しにくい状況的対象の『社会』であると考えられ，われわれの設定した社会・政治的態度の特質を示している。

以上のことから，疎外態度（アノミーを含めて）は，『社会』に対する個人の関係態度の重要な一側面としてとり上げることができる。この観点からまず従来のこの分野の研究の概観を行った上でわれわれの方法論を展開することにしよう。

［　従来の疎外・アノミー研究の概観　］

1．哲学的研究から実証的研究へ

疎外（alienation）という概念は，多くの社会科学者によって取り扱われて来た。フィヒテ（J. G. Fichte）は，外化（Entäußerung）という概念を用いて，自己を外化することにより客観的世界を定立させようとする精神作用があるとし，この客観の定立が主観の疎外の始まりであると考えた。以後，ヘーゲル（G. W. F. Hegel）の自己疎外（Entfremdung seiner selbst），フォィエルバッハ（L. A. Feuerbach）の宗教的自己疎外論が登場し，その後，マルクス（K. H. Marx）は労働疎外の概念を提唱している。哲学的文脈で取り扱われる疎外の根本的意味とは，自我を何か他のものへ譲り渡す（alienate）ことであり，こうした精神の他者的なあり方を疎外と呼んだ。

これらの哲学的な疎外概念の分析は思弁的なものとして経験科学あるいは実証科学の観点からは批判されることが多い。しかし，疎外を実証的研究の対象として取り扱うためには最初の観点としては大いに示唆的であって，必ずしも否定されるものではない。

その後，疎外はエーリッヒ・フロム（E. Fromm）やフリッツ・パッペンハイム（F. Pappenheim）らに代表されるように，産業社会・現代社会における人間の主体性喪失や歯車化，大衆への同調を論じる場合に用いられる必須概念となっている。

一方，疎外は大きく分けて二つの現象的把握が可能になると考えられる。すなわち，個人の主観的要素に現れる心理的な現象である主観的疎外と個人とは相対して存在し場合によっては主体の心理とは独立した外的な社会状況等に現れる社会的現象としての客観的疎外とである。この2分法はそのまま研究方向の2分割を導いた。

さて，主体の心理的問題として疎外を扱い，経験的実証的に疎外を理論化しようとした流れが，1950年代後半のアメリカ社会学で起こった。その端緒といえるのがNettler(1957)である。Nettlerは「社会からの疎隔感（the feeling of estrangement from society）」を疎外として把え，17

項目から成る疎外尺度を構成している。

次にSeeman(1959)は，疎外の社会的客観的条件をふまえながら，疎外状況を認知する個人の心理的主観的側面を強調し，従来の研究から疎外の概念を5つの成分に整理し直して実証的研究への道を開こうとした。Seemanは，Rotter (1954) の提唱する社会的学習理論 (social learning theory) と疎外の多様な意味とを結びつけて論じており，心理学的見地を導入したことが注目される。

Rotterの社会的学習理論では，「人の行動の生起力は行為が成果の強化をもたらすであろうという一般的期待 (Generalized Expectancy) と強化自体の価値との関数である」ことを基本命題とし (水口1985)，これに加えて人格の類型として「内的統制－外的統制」(Internal control ── External control) の対極的な概念を提案している。このRotterの理論によれば疎外は次のように説明できる。すなわち，社会問題が複雑化し，その解決が困難であると認知されると，その個人は種々の生活局面において，他律化され無力であると感じるようになり(外的統制)，疎外されていると感ずる傾向が強まるといえる。

このように，疎外を論ずる上で，Rotterの内的統制－外的統制の概念は比較的統一的な見方を可能にするという点で有用である。

さて，疎外の実証的研究を始めるにあたってSeemanが次の疎外の5成分を挙げて論じたことは有名である。

(1) 無力性 (Powerlessness)

彼によれば，「無力性」という疎外の概念は，資本主義社会における労働者の置かれた状況に関するマルクスの見地に端を発する。この「無力性」という概念は，多くの文献で取り扱われてきたものであるが，Seemanは先述のRotterの「内的統制―外的統制」と関連づけた。

この「無力性」とは「人自身の求める諸成果 (the outcomes) と強化 (reinforcement) の生起を人自身の行動では決定できないという期待 (expectancy) や見込み (probability) 」であると定義される。さらにSeemanはこのように表現された「無力性」概念の適用範囲を社会―政治的な出来事 (socio-political events) に影響を及ぼしうるという個人の感覚，すなわち政治システム・産業経済・国際事象などへの統制に限定したいとした。このように，彼は「無力性」の概念を心理的認知面に限定することを提案したのである。

(2) 無意味性 (Meaninglessness)

これは自己が関わる事件－事象を理解しようとする個人の感覚において，その事件―事象が複雑で理解しがたいという見通しが成り立つとき，生じうるものである。Seemanによれば先述の無力性とはある条件の下で独立した型であるとされる。Seemanによれば，例えば，知識人のように社会的事象について理解しているからといって，必ずしも社会的事象への個人的統制が可能であるという見込みを持っているとはいえない場合もあるからである。しかし，一般的には，社会の複雑な事象が理解不可能であればあるほど，無力感を感じるようになると考えられるから，無力性と無意味性との相互関係についてはSeemanを超えて精緻な考察を必要としよう。この点については後のわれわれの因子分析的研究が問題解決の一端を与えるかも知れない。

(3) 無規範性 (Normlessness)

この疎外の第3のパタンはデュルケーム (É. Durkheim) の「アノミー」から導かれたものである。元来「アノミー」とは個人の行為を規制する社会規範の崩壊，または行為を規制する効力を失った状況を意味するが，

Seemanは，マートン（R. K. Merton）の考え方に従って，その人の個人的な観点からみて，アノミックな状況とは，「所与の目的を達成するためには社会的に承認されていない行動が必要とされるような高い期待（予想）が存在する状況」であると定義することが出来るとしている。

このような見通しが，一般化されると，アノミックな状況を消極的に肯定するようになり，無規範状態の社会を生きていくためには，いわゆる世間との妥協もせざるもえなくなると考えられる。こうした他律的行動が選択される背後には，消極的な容認態度がその個人の中で合理化機能を果たすと解釈できる。

(4) **孤立**（Isolation）

Seemanのいう孤立とは，個人の社会的不適応がもたらす孤独感ではなく，知識人にみられるような民衆の文化的水準から疎隔されている人の状態を指している。すなわち，当該社会における文化や中心価値に対して低い評価しか与えない人の精神状態を言う。しかし，常識的にみて，社会的不適応の結果による孤立をこの概念に含めないことは，不自然である。

Nisbet（1972）や水口（1985 b）は社会的不適応の結果としての孤立を疎外概念の一つとして認めうることを主張しており，本研究でも広義の孤立を疎外の一部であると考える。また，Seeman（1972）も後に社会的不適応の結果による孤立をこの概念として認めている。

(5) **自己疎隔**（Self-estrangement）

この概念の文字通りの意味はフロムのいうように，自分が自己自身から疎隔されることである。この概念は先述してきた4つの成分とはちがって何が外物からの疎外であると特定化しにくい。Seemanは，自己疎隔されているということは，社会の諸条件が別の状態であれば人がありえたかもしれない理想的な状態より劣った状態を指すと定義する。人々はその理想的な条件でない社会状態に対して同調しようとしたり，見かけにとらわれて生きるようになる。その状態を，リースマン（D. Riesman）は「他者志向」として論じた。

Seemanはこの疎外の意味を特定化することはむつかしいとするが，社会的学習理論の概念を用いて疎外を表現しようとする。自己疎隔とは「予期される将来の報酬（reword），すなわち，その活動自体の外部にある報酬に，所与の行動の生起が従属している状態」であると定義している。例をあげれば，労働それ自体ではなく賃金のためだけに働く労働者の姿が自己疎隔の例であるとした。

このように，Seemanは疎外を5つの成分にまとめ，これらを参考にして疎外尺度を構成し，アメリカ，スウェーデン，フランス等においてこれを実施した。日本では斉藤・寺田・池田（1975, 1980）らによるSeemanの調査票を用いた調査研究が行われている。

Seemanの5成分による疎外の概念規定は操作的には必ずしも明確ではない。この点については，本稿の考察の節で再考する予定である。

Seeman同様，Dean（1961）は疎外を測定するために，

1）無力性

2）無規範性

3）社会的孤立（Social isolation）

のカテゴリーを用意し，その尺度化をはかっている。

その後，疎外尺度の因子分析により，その次元性（dimensionality）を明らかにしようとした研究があらわれた。

2．疎外の因子分析的研究

Neal & Rettig (1963) は Ahmavaara のプロクラステス回転法（規準化しない斜交変換行列を用いる斜交プロクラステス法）を用いて，ホワイトカラー層とブルーカラー層の疎外次元の構造比較を試み，2つの分析結果の高い一致性をみたと報告している。

彼らは疎外と上昇志向とが1つの因子として抽出されることを期待したが，異なる独立した因子として抽出された。斜交回転を施せば，因子間相互の関連も検証しうるが，直交解であるバリマックス回転を使用しただけであったため，因子間の相互の機能的関連は見いだしようがなかった。その後，彼等の因子分析は，Cartwright (1965) によって因子分析の誤用であると批判を受け，Neal & Rettig (1967) は，ホワイトカラー層とブルーカラー層を一つの集団とみなして，そのデータから因子分析を行い Oblimax 法による斜交回転を施して，下記の9つの斜交因子を得た。

(1) Powerlessness（無力性）
(2) Inevitability of War（戦争の不可避）
(3) Political Normlessness（政治的無規範性）
(4) Economic Normlessness（経済的無規範性）
(5) Anomie（Srole's Anomie）（アノミー）
(6) Personal Freedom（個人的自由）
(7) Communal Value（共同的価値）
(8) Competive Mobility Orientation（競争的上昇志向）
(9) Intrinstic Value（本質的価値）

これらの9因子間相関行列から二次因子分析（Secondary factor analysis）を行い，その結果より(1)〜(5)の疎外の下位次元と考えられる各因子が二次因子『疎外』としてまとまることを示した。ところが彼らは，二次因子分析の段階でふたたび9因子を抽出するという疑問の残る分析を行っている。しかし，彼らの因子分析的研究は疎外の多次元性とその下位次元の相互連関性を示唆する結果を与えた最初の試みとして評価することができる。

さらに，疎外は高次の社会的態度概念に加えられうることも予想され，Struening & Richardson (1965) は，権威主義・アノミー・疎外の三つの概念には重複と関連が存在するとして，三つの概念をそれぞれ測定する項目群を同一バッテリーとして測定を行い，これらの相関行列を主成分分析しバイコーティミン法による斜交回転を行って斜交の9主成分を得た。これらの9主成分は次のように解釈された。

(1) Alienation via Rejection（拒否による疎外）
(2) Authoritarianism（権威主義）
(3) Trust and Optimism（信頼と楽天主義）
(4) Authoritarian Family Orientation（権威主義的家族志向）

(5) Perceived Purposelessness（知覚された目標のなさ）
(6) Conventionality（因習尊重）
(7) Religious Orthodoxy（宗教正統性）
(8) Self-Determinism（自己決定主義）
(9) Emotional Distance（感情的疎隔）

これらの9因子のうち，第1因子のAlienation via Rejectionは権威主義・アノミー・疎外の3概念にまたがる因子であるとされた。

その論拠は，この因子に対してアノミー尺度，権威主義の一側面と考えられてきたcynicismとsuspicionがそれぞれ高い負荷を持ったことである。さらに細かく解釈すると，この因子は社会や対人関係についての個人的志向の側面を反映する特性であると考えられた。この因子で定義づけられる項目に賛成する人は，不確実感やペニミズム，猜疑的不信，未来に対する極度のペシミズム，他者の目的についてのシニシズム，孤独で他人との関係喪失等々の社会に対する一般的知覚を持っている人々と考えられる。このように，彼らは三つの概念を因子分析して，各概念を整理しようとした。

一方，Ray (1982) は一般的な尺度を構成しようとした。彼は公刊されている疎外尺度項目を収集し，最終的に168項目を集めた。彼はそれらを複数のコミュニティのサンプルに施行し，信頼性のロスを抑えた20項目からなる一般疎外尺度(General Alienation Scale)を構成した。ところが，せっかく168項目を収集しながら，20項目から成る1尺度しか構成しなかったなど手続き面の不備が目立っている。

3．アノミー研究

アノミーという概念を社会学的に分析したのは，かのデュルケームが初めてであり，グレージア（S. D. Grazia）もアノミー概念を分析した。これらの研究は社会の客観的状態としてのアノミー論である。一方，心理現象面に重点をおく流れとしては次の2人が有名である。マックレバー（R. M. Maclver）は社会的道徳・義務感を持たずに衝動的に行動する人の心理状態をアノミーとし，D. Riesmanはアノミー型人間という概念で，社会の行動についての規範に同調する能力を欠いた人間類型を表現した。さて，マートンはこれらのアノミー論を体系化しようと試み，この議論をうけて，アノミーの尺度化を試みたのが，Srole（1956）である。

彼のアノミー尺度（eunomia-anomia scale）は，

(1) 政治的有効性感覚の欠如
(2) 社会の予測不可能性
(3) 生活目標の後退感
(4) 無力感
(5) 社会的心理的連帯感の欠如

を測るとされる5つの項目から成る。彼はこの尺度を用いて，社会的階層との関連，権威主義，少数民族に対する偏見との関連を分析している。しかし，何分，項目数が少ないのが欠点である。

4．日本における疎外・疎外感研究

田崎・吉川（1975）は，疎外感と疎外（ないしは人間疎外）は一応別者としてみる必要があるとし，彼らは，主観的意識としての Alienation，つまり疎外感を心理学的概念としうると考えた。

また，宮下・小林（1981）は，疎外感と適応との関係を発達心理学的に論ずる中で，従来の，Srole（1956）や Nettler（1957），Dean（1961）の疎外感尺度が疎外感と疎外の概念に混乱があるとする。

一方，太城・三島（1978）は Seeman 等を参考にして，「疎外現象」を純粋に心理的なものと規定し，その内容を「無意味・無力性」，「無規範性」，「他人に対する不信」，「孤独」，「政治的無関心」の5カテゴリーに限定した。さらに，彼らは疎外現象を，Eysenck のパーソナリティ理論に従って次のように位置づけている。

「疎外現象とは単なる一時的な感情ではなく，持続性を有するが，しかし態度とは異なり，ある一定の対象を持たないところの情緒的色彩の濃い行動傾向である」，さらに，「習慣的反応次元の価値的側面と感情的側面との中間あたり，具体的には態度と情緒の中間に位置する概念であるととらえる」とした。

このように，彼らは，疎外現象と従来の態度（attitude）概念とを比較し，疎外現象の態度とは異なる点として，ある一定の対象を持たない事，さらに情緒的色彩が強い事を挙げている。

これらの諸研究を概観してみて，本研究では，疎外やアノミーを，『社会』に対する個人の関係態度の一部として取り扱い，さらに他の概念を加えた上で，分析を行うことにした。この方法は疎外やアノミーとよばれるものが他と如何なる機能的関連があるかを明確に示す上で利点があると考える。

従来の疎外に関わる因子分析的研究は，疎外領域のみに対して，あるいはアノミー・権威主義的パーソナリティを加えた変数の因子分析に終始するものであった。ところが，疎外やアノミー，権威主義的パーソナリティといった概念は人間のネガティブな心理面に関わるものである。そこで，社会的存在としての人間の全体的特性を把えようとする場合は，ポジティブな面やニュートラルな面も視野に入れておくべきである。

以上の点を考慮してわれわれは，『社会』に対する個人の関係態度として考えられる態度項目を広く収集した。さらに『疎外』は「社会」と「個人」の対峙において成立する概念であることから，「社会」と「個人」の融合的関係に成立する概念として『適応』を想定した。

このように，われわれは社会・政治的態度次元を，疎外・アノミー及び適応を含んだ広域な概念次元として設定したのである。

［方　　法］

1．項目の収集

本研究のように，理論的枠組が未確定の領域における尺度構成を開始する場合には，最初から測定領域を厳密に限定するよりも，まずは広く既存の研究例より測定項目を収集し，またその作業から生まれる新たな仮説概念に適なう項目群を追加していくといった方法のほうがより生産的であると考えられる。そこで今回は，文献調査を行って，まず疎外尺度項目を収集し，さらに，関連が予想された「生活価値観」や社会的態度・政治的態度の研究で使用されている項目を収集した。さらに，本研究に必要と考えられる項目を新たに作成するため，日本人の社会・政治的態度を間接的に論評している竹内（1985）の論考を基に粗述を行い，それらを意見項目の形に書き直した。次にこれらのアイテムプールの基礎となった研究領域と項目収集の手順をまとめておく。

(1) アメリカ社会学・社会心理学における疎外尺度・アノミー尺度の因子分析的研究から

i）Neal & Rettig（1967）による疎外尺度・Sroleのアノミー尺度・Seemanのstatus orientation scaleの因子分析的研究から，疎外尺度とSroleのアノミー尺度の項目を翻訳した。（約30項目を採用）

ii）Ray（1982）による一般疎外尺度（General Alienation Scale）の構成研究から，上記尺度項目から重複を除いた10項目を採用した。

iii）Struening & Richardson（1965）による疎外・アノミー・権威主義尺度の因子分析的研究から，上記2研究で用いられた項目以外の内容をもつ項目を翻訳し，約25項目を採用した。

(2) 日本の社会的態度・政治的態度研究から

i）安田・原（1982）の『社会調査ハンドブック』より権威主義的価値態度項目，アノミー項目，政治的関心・無関心項目を約20項目採用した。

ii）辻岡・清水（1975a）の社会的態度の8因子尺度より，自己中心主義尺度，革新主義尺度，保守主義尺度，因習主義尺度，非合理的反体制主義尺度から約25項目採用した。

iii）早川（1975）の「政治的関心」に関する因子分析的研究より，政治的態度項目を約15項目採用した。

(3) 生活価値観研究から

i）生命保険文化センター・野村総合研究所（1980）による『日本人の生活価値観――将来社会展望のために――』から価値観項目を約25項目採用した。

(4) その他

i）前述の竹内（1985）の論考を参考にして約20項目を作成した。

以上の如く，アイテムプールを構成し，さらに全体の文体を統一した。この過程で，さらに新

しい項目が付け加えられた。

次に質問紙に採用する項目総数を200とし，仮説的に定めた，例えば，適応態度・参加・生活後退感などの15のカテゴリーに項目を割り当てた。この15のカテゴリーをスパイラルに組み換え，その順序にしたがって項目を配列した。この操作の目的は，被験者の反応が各項目ごと，可能なかぎり，独立に行われるようにするためである。そこで，なるべく類似する項目が前後しないように配列を行った。回答法は，「まったくそう思う・だいたいそう思う・どちらでもない・あまりそう思わない・まったくそう思わない」の5件法によった。

2．被験者

大学生男子184名(平均年齢20.2歳, S. D.＝1.073), 同女子104名(平均年齢19.8歳, S. D.＝0.978)に昭和60年6月に実施した。以下の分析は，男子集団と女子集団を合わせた，全体集団(計288名)を対象としている。(男女間の性差の問題は次の発表に譲ることにした。)

3．実施法

実施方法は，テスト施行者が口頭で項目を読み上げ，被験者は読み上げたスピードに合わせて回答を行う強制速度法を採用した。検査開始初頭は，テスト施行者が項目を読み上げた後，回答に要する時間を2～3秒としたが，被験者が回答要領に慣れてきた後は，ややスピードを上げて回答を行わせた。1回の検査所要時間は約40分間であった。

［結果の分析］

1．習性水準尺度の構成

1次因子水準の比較的安定した因子構造をうるためには，まず内的整合性の高い習性水準の(hexis level)項目群尺度を用意しなければならない。そこで習性水準の尺度を構成するために，本分析では，主成分分析を用いて，内的整合性の高い項目群のグルーピングを行った。この出発尺度の構成は次に示す2段階の分析手順により行われた。

(1) 200項目の主成分分析に基づく尺度構成

まず，全体集団288名の200項目への評定点から，積率相関によって，200×200の項目間相関行列を求め，Scree test，Scree gragh（辻岡・東村1975）の結果より13主成分を抽出することとし，13主成分をVarimax回転し，さらにPromax回転により，斜交解の単純構造解を求めた。次に各主成分において，準拠構造値が±0.3以上の項目を重複なく集めた。論理的妥当性の観点から解釈のつく主成分についての項目群を習性水準尺度として採用した。また，一つの主成分に含まれる項目群が15項目以上あれば，さらに尺度分割をするために，再度，同一習性水準内で主成分分析を行い，より内的整合性（等質性）の高い2尺度または3尺度に分割した。この段階で17尺度が

構成された。

(2) (1)の段階で取りあげられなかった項目についての主成分分析による尺度構成

方法は(1)と同じである。いずれの尺度にも採用されていない項目群の相関行列を主成分分析し，この段階で7尺度を構成した。

このように等質性の高い習性水準尺度がいくつか採用された場合，残りの項目は無意味な誤差項目と考えることは必ずしも正しくはない。何故ならば，第一回目の主成分分析で抽出される分散は，項目バッテリーにおいる多数派の分散を占める項目群であって，これらの習性水準の主成分とはやや異質の特殊な因子分散によって占められたより少数派の項目群，換言すればバッテリー内において出現密度は低いが，しかし心理学的には重要な意味をもつ項目も残存している可能性がある。そこでそのような多数派を除いた残りの項目群の中でもっとも大きな分散を持つ主成分を求めるのがこの(2)の分析段階で尺度化の探索である。

これらの手続きから，最終的に，計24尺度を得た。とりあげた項目数の合計は177である。上記の尺度構成では，単に準拠構造値のみならず論理的妥当性をも重視して項目選択を行った。その結果，ここで構成された出発尺度は論理的妥当性や内的整合性の面からは一応の水準に達したものと考えられる。

次に，これらの操作を行って得た24尺度内の項目を示す。項目数が多いために，各尺度の代表的項目を挙げるに留めた。

習性水準尺度の項目例

（1）集団参加肯定尺度：Ｐコ（略号，以下同様。），７項目

住民運動によって，住民一人一人の意志を政治に反映させることができる
我々が努力を傾けることによって世界平和の維持は可能となる
成功する見通しが少なくても，住民運動は，決して無駄ではない

（2）集団参加否定尺度：Ｐヒ，６項目

社会をよくしていこうとするいろいろの団体活動は，結局，あまりその目的を果たすことができないだろう
社会運動の多くは，波風をたてているのにすぎないと思う
現在の政治の方向を変えるための運動はわずらわしいばかりで実際にはあまり効果がないと思う

（3）主体的個人参加尺度：ＩＰ，11項目

社会のために役立とうとすることは，我々一人一人の義務である
住みよい社会をつくるためには，私たち一人一人が努力していく覚悟をしなければならない
社会の一員として，日本の現状と将来を真剣に考える必要がある。

（4）社会状況に対する楽観尺度：Ｓラ，６項目

現在の状況から考えて，これからの若者にとって未来は明るいと思う
将来の社会は今よりも理想社会に近づくと思う
今の社会は希望がもてるかなりましな社会だと思う

（5）社会状況に対する悲観尺度：Sヒ，5項目

これからの世の中は，かえって昔より住みにくくなると思う
国際情勢はこれからますます不安定になると思う
将来の政治の方向には希望がもてないと思う

（6）ペシミズム尺度：ヒP，4項目

物が豊富になりすぎて，かえって近ごろの人々の心が貧しくなっていると思う
近頃，世の中で起こる事件を見聞きすると救いのなさが感じる
役所の人びとは企業の利益を優先して，我々国民の要求にこたえてくれない

（7）社会体制に対する楽観尺度：SE，6項目

外国に比べて税金は国民のためにまずまず有効に使われていると思う
結局，国民一人一人の票が，国の政治を決定すると思う
たいていの政治家は大衆のためになる仕事をしていると思う

（8）社会秩序の肯定尺度：OA，7項目

今の社会は住みよい社会であると思う
私たちは合理的で整った制度のもとで暮らしていると思う
日本の裁判は相当公平な判決を下していると思う

（9）適合尺度：AI，5項目

戦争は国と話し合ってどうしても避けなければならない
万一のことがあっても大丈夫なように貯蓄はしておいたほうがよい
社会生活を営む上で，事の善悪を判断する法律はやはり必要である

（10）人間関係の疎隔感尺度：HU，8項目

世の中には，悪い人間というものはそんなにいないと思う（逆転）
現代社会では，他人を思いやる人がだんだん少なくなってきていると思う
世間の人の多くは孤独で他の人とつながりをもたないと思う

（11）消極的現実肯定尺度：シヨ，9項目

世間によくない出来事が生じるのもやむをえない
国の発展のためには少数の人々が犠牲になるのは現実としてやむをえない
政治面や経済面での不公平は仕方のないものである

（12）現実主義尺度：RE，8項目

イデオロギー同士の論争ばかりでは，平和は実現されないと思う
今日の社会の矛盾に苦しむ人々を助けることはそれほど容易でない
私たちはもっと醒めた目で社会の状況をみることが必要である

（13）享楽志向尺度：PL，9項目

先のことはどうなるか分からないから，私たちは今を楽しく生きればよい
今の世の中では，人々は一日一日を楽しくすごせばよい
人生は現在が楽しければよい

（14）政治的疎隔尺度：PO，7項目

政治のことはむずかしすぎて一般の人間には理解しにくい
友達と政治について議論をするのはあまり気がすすまない
日常生活のなかに政治のことがはいりすぎると，どうしてもわずらわしいものである

(15) 無力・疎外感尺度：ＡＬ，９項目

今の世の中では大きな夢や希望などもっていても仕方がない
社会では，個人の力が生かされる余地がまだまだ残されていると思う（逆転項目）
この世の中で個人の果たすべき役割はちっぽけなものである

(16) 戦後的安定・平穏感尺度：ヘイ，６項目

外国が日本に戦争を仕掛けてくることは現状では考えられないと思う
今の国際状況では，全面核戦争が起こる可能性はめったにないと思う
将来，日本が国際紛争にまきこまれることはほとんどないと思う

(17) 無規範の容認尺度：ＮＯ，６項目

時代とともに善悪の判断基準は変わっていくものである
道徳的なことばかり主張していたら事業に成功することはむずかしい
正直一途では世の中を渡ってゆくのはむずかしい

(18) 道徳性尺度：ＭＯ，５項目

人間の本性は基本的には協調心であると思う
近頃，家族間の意見の食い違いが大きくなっているのは悲しいことだ
義理人情はいつの世でも社会生活にとって欠くことのできないものだと思う

(19) 一般的悲観尺度：ヒカ，11項目

現在の日本では，人々の権利がさほど侵害されていない（逆転項目）
社会は結局少数の権力者によって動かされていると思う
庶民の生活は絶えざるインフレにおびやかされている

(20) 個人効用尺度：ＩＤ，13項目

社会問題を解決する責任は主に行政府にあって，我々一人一人にはあまりない（逆転項目）
社会問題を解決するためには，個人一人一人の力がやはり大切だと思う
たくさんの人々が投票に行くのだから，自分一人ぐらい棄権してもかまわない（逆転項目）

(21) 外的統制・他律的社会観尺度：ＥＣ，12項目

今の世の中はあまり複雑であるので何がよいのかわかりにくい
多くの人は投票するさいに周囲の人に左右されていると思う
私たちの考えはマスコミに操作されている

(22) 個人無力尺度：ＰＷ，５項目

個人の力では社会の矛盾を正すことはむずかしい
国の政策決定に個人の影響力はあまり多くないと思う
無力な個人は社会の中で自分の利益を守ることはむずかしい

(23) 適合志向尺度：ＡＤ，６項目

私の住んでいる地域は暮らしやすく快適であると思う
政治に対していたずらに批判するよりも政府のやり方に協力することの方が大切であると思う
どんな社会になっても，我々は状況に応じて生きていけると思う

(24) 個人参加の義務尺度：ＪＵ，５項目

投票に行かない人がいるからよい政治が行われないと思う
職場にある程度，派閥があっても悪いこととは思わない（逆転項目）
我々の意見は署名運動や集会を通じて国の政治に反映されなければいけない

Table 1　習性水準尺度間相関行列，平均，標準偏差

		Pコ	Pヒ	IP	Sラ	Sヒ	ヒP	SE	OA	AI	HU	ショ	RE	PL	PO	AL	ヘイ	NO	MO	ヒカ	ID	EC	PW	AD	JU
1 集団参加肯定尺度	Pコ		−721	562	244	−154	033	387	013	033	−219	−394	−234	−464	−363	−315	−042	−223	277	−307	665	−196	−453	−277	602
2 集団参加否定尺度	Pヒ	−721		−368	−079	082	−024	−170	191	137	186	508	346	518	391	354	148	277	−037	209	−591	327	351	422	−510
3 主体的個人参加尺度	IP	562	−368		017	087	304	178	177	357	000	−325	038	−317	−177	−168	−189	−141	467	011	730	060	−334	−036	498
4 社会状況に対する楽観尺度	Sラ	244	−079	017		−706	−419	617	438	−021	−350	106	−249	−072	−210	−329	413	−114	147	−628	036	−323	−222	231	067
5 社会状況に対する悲観尺度	Sヒ	−154	082	087	−706		548	−508	-394	068	401	−054	266	104	219	348	−482	165	−019	637	052	415	159	−196	016
6 ペシミズム尺度	ヒP	033	−024	304	−419	548		−422	-201	209	424	−097	173	−003	205	331	−317	178	226	537	097	302	117	−095	188
7 社会体制に対する楽観尺度	SE	387	−170	178	617	−508	−422		391	−060	−363	−014	−140	−212	−362	−344	242	−199	232	−671	289	−299	−404	130	239
8 社会秩序の肯定尺度	OA	013	191	177	438	−394	−201	391		412	−108	233	143	092	−057	−023	322	067	306	314	−005	091	025	469	−036
9 適合尺度	AI	033	137	357	−021	068	209	−060	412		170	037	258	073	065	225	−020	126	186	175	131	327	047	320	094
10 人間関係の疎隔感尺度	HU	−219	186	000	−350	401	424	−363	−108	170		105	299	162	214	432	−182	203	−003	481	−177	419	218	022	−069
11 消極的現実肯定尺度	ショ	−394	508	−325	106	−054	−097	−014	233	037	105		191	515	271	298	270	430	024	027	−503	355	232	460	−405
12 現実主義尺度	RE	−234	346	038	−249	266	173	−140	143	258	299	191		228	254	331	−092	355	−022	276	−061	525	200	151	−184
13 享楽志向尺度	PL	−464	518	−317	−072	104	−003	−212	092	073	162	515	228		328	346	167	393	−113	248	−454	375	315	338	−357
14 政治的疎隔尺度	PO	−363	391	−177	−210	219	205	−362	−057	065	214	271	254	328		392	007	263	−011	393	−310	349	461	216	−324
15 無力・疎外感尺度	AL	−315	354	−168	−329	348	331	−344	−023	225	432	298	331	346	392		−099	407	−051	418	−353	444	433	151	−194
16 戦後的安定・平穏感尺度	ヘイ	−042	148	−189	413	−482	−317	242	322	−020	−182	270	−092	167	007	−099		−067	029	−297	−189	−147	068	303	−156
17 無規範の容認尺度	NO	−223	277	−141	−114	165	178	−199	067	126	203	430	355	393	263	407	−067		−090	291	−340	474	296	115	−202
18 道徳性尺度	MO	277	−037	467	147	−019	226	232	306	186	−003	024	−022	−113	−011	−051	029	−090		−073	342	102	−094	200	218
19 一般的悲観尺度	ヒカ	−307	209	011	−628	637	537	−671	−314	175	481	027	276	248	393	418	−297	291	−073		−104	470	302	000	−156
20 個人効用尺度	ID	665	−591	730	036	052	097	289	−005	131	−177	−503	−061	−454	−310	−353	−189	−340	342	−104		−130	−428	−220	542
21 外的統制・他律的社会観尺度	EC	−196	327	060	−323	415	302	−299	091	327	419	355	525	375	349	444	−147	474	102	470	−130		272	196	−200
22 個人無力尺度	PW	−453	351	−334	−222	159	117	−404	025	047	218	232	200	315	461	433	068	296	−094	302	−428	272		120	−351
23 適合志向尺度	AD	−277	422	−036	231	−196	−095	130	469	320	022	460	151	338	216	151	303	115	200	000	−220	196	120		−224
24 個人参加の義務尺度	JU	602	−510	498	067	016	188	239	−036	094	−069	−405	−184	−357	−324	−194	−156	−202	218	−156	542	−200	−351	−224	
MEAN		21.2	19.6	42.3	14.7	16.1	14.5	15.8	24.2	21.2	24.9	26.2	30.8	28.7	24.7	27.6	14.6	21.3	16.1	38.3	44.5	43.4	16.5	19.1	15.0
S. D.		4.74	4.02	6.34	3.76	3.43	2.84	3.80	4.15	2.59	4.76	5.63	3.66	6.47	4.29	5.29	4.16	3.59	2.93	6.17	6.79	6.13	3.04	3.40	3.10

（平均，標準偏差を除いて小数点省略）

2．習性水準尺度間相関行列

以上の24尺度の尺度得点（5件法単純合計得点）から，積率相関によって尺度間相関行列および平均，標準偏差を求めた。(Table 1 参照）この相関行列を視察してみると，比較的高い相互相関を持っている尺度群があることが認められる。この相関行列に潜在するいくつかの共通変動因をうるために，次に一次因子分析を行った。

3．因子数の決定と因子分析

24尺度間相関行列に，辻岡・東村（1975）の Scree test，Scree graph，及び Strata graph を適用し，6因子を抽出することにした。共通性を主因子法の繰り返し推定により推定し，主因子解を Varimax，Promax 法で回転し，さらに単純構造化をはかるために Rotoplot 法で3回の微小回転を行った。得られた準拠構造行列，及び一次因子間相関行列は Table 2，Table 3 に示したとおりである。

4．因子の解釈と項目分析

先に述べた斜交6因子から延長因子分析（extension factor analysis）を行い，一次因子に対する項目得点のファクターパタン行列を求めた。

この方法の算法の基礎は次のようにあらわされる。まず，項目変量の因子構造値は項目変量と因子得点の相関係数であることから，次の(1)式で求められる。

$$(1) \qquad V_{fs}=\frac{1}{N}Z'F$$

(1) 式において，V_{fs} は項目の因子構造行列（n×m次；nは項目数，mは因子数を表す），Nは被験者数，Z は項目の標準得点行列（N×n次）F はN×m次の因子得点行列である。

次に(1)式によって求められた項目の因子構造行列から項目のファクターパタン行列 V_{fp}（n×m次）を求める。このために V_{fs} と V_{fp} の関係式を利用する。すなわち，先の（1)式の内，Z の内容を展開すると，

$$(2) \qquad \begin{aligned} V_{fs} &= \frac{1}{N}Z'F \\ &= \frac{1}{N}(FV_{fp}'+UD)'F \\ &= \frac{1}{N}V_{fp}F'F+\frac{1}{N}DU'F \\ &= V_{fp}C_f \end{aligned}$$

となり，この(2)式中の U（N×n次）は独自因子得点行列，D（n×n次）は独自因子パタンを対角項に持つ対角行列，C_f（m×m次）は因子間相関行列である。この(2)式の右辺第2項は空行列となる。したがって(3)式が得られる。

Table 2 一次準拠構造行列

習性水準尺度名＼一次因子名	評価(楽観－悲観) Evaluation	疎外 Alienation	参加 Paticipation	他律性 Heteronomy	社会的統合 Social Integration	適合 Adaptation	共通性
社会状況に対する楽観尺度	**582**	−112	016	078	065	065	678
社会状況に対する悲観尺度	**−569**	084	−022	080	105	−171	737
戦後的安定・平穏感尺度	**477**	071	−163	021	063	021	362
一般的悲観尺度	**−415**	**345**	−063	000	085	−053	699
社会体制に対する楽観尺度	302	**−442**	036	149	058	054	674
ペシミズム尺度	−234	**417**	089	016	319	−129	609
個人無力尺度	048	**398**	−089	028	−076	064	427
政治的疎隔尺度	006	**324**	−189	098	102	−057	355
無力・疎外感尺度	−107	**319**	047	253	−025	074	495
集団参加肯定尺度	102	−094	**556**	080	131	000	825
集団参加否定尺度	−007	021	**−555**	130	036	023	713
適合志向尺度	251	079	**−412**	103	244	097	508
個人参加の義務尺度	−046	−021	**357**	−074	143	013	484
無規範の容認尺度	−035	051	197	**552**	−124	060	506
消極的現実肯定尺度	326	007	−278	**551**	178	−203	682
外的統制・他律的社会観尺度	−328	−004	036	**466**	−004	137	663
享楽志向尺度	095	088	−233	**338**	029	−065	450
道徳性尺度	162	106	−164	035	**547**	−126	476
主体的個人参加尺度	−226	−061	166	−082	**316**	151	765
適合尺度	−209	098	037	−038	−003	**481**	508
社会秩序の肯定尺度	216	−079	−114	060	030	**429**	672
現実主義尺度	**−406**	−169	014	282	−192	**308**	454
人間関係の疎隔感尺度	−254	230	027	113	031	035	337
個人効用尺度	−268	−241	232	−167	174	090	761

Table 3 一次因子間相関行列

	評価(楽観－悲観)	疎外	参加	他律性	社会的統合	適合
評価（楽観－悲観）		−390	031	−205	−075	186
疎外	−390		−386	478	−377	−070
参加	031	−386		−489	456	−094
他律性	−205	478	−489		−158	229
社会的統合	−075	−377	456	−158		532
適合	186	−070	−094	229	532	

(3)　$V_{fp}=V_{fs}C_f^{-1}$

このように，延長因子分析によって，項目変量のファクターパタン値を得た。次いで，因子的真実性の原理を満足させ，かつ論理的妥当性を満たしうる項目を一尺度につき，12〜15個選択した。

この項目分析は，辻岡・清水（1975 b）の因子的真実性の原理による項目分析のためのコンピュータ・プログラムを用いて行った。この際，同時に構成尺度の評価指標として，因子的真実性係数（coefficient of factor trueness）と Cronbach（1951）のα係数（coefficient α）を求めた。

本研究では因子の解釈は，尺度間因子分析によって得た準拠構造行列と項目分析により最終的に選択された項目の具体的な論理的内容とを総合し行うことにした。得られた一次因子および一次因子尺度は次の 6 通りである。

(1) **評価（楽観－悲観）因子**（Evaluation ：E V）（12項目）

Table 2 の準拠構造行列によると，この因子は，社会状況に関する楽観尺度に＋.582，戦後的安定・平穏感尺度に＋.477の正の負荷を，一方，社会状況に関する悲観尺度に－.569，一般的悲観尺度に－.415，現実主義尺度に－.406の負の負荷を持っている。これらのことから，この因子は楽観－悲観の対極構造を持っていることがわかる。項目の論理的妥当性の点からみれば，戦後的安定・平穏感尺度は楽観側であり，現実主義尺度は悲観側への態度である。因子分析による因子の内容は，このように，準拠構造行列の負荷の状況からある程度の示唆は得ることはできるが，具体的な因子の解釈はかならずしも明瞭ではない。そこで，より具体的な因子の解釈を行うためには，延長因子分析によって算出された項目のファクターパタン，ファクターストラクチャー値が重要な参考となる。ここでは，それらの数値をもとにして構成された当該因子の因子尺度の項目を掲載した Table 4 により解釈を行うことにする。表中の Item №の左に付された＊のマークは逆転項目であることを示す。したがって＊マークの付いた項目の内容を逆にすることによって尺度項目全てが同一方向に解釈できる。

さて，尺度項目の内容から考えて，この尺度は「現在の状況から考えて，これからの若者にとって未来は明るいと思う（項目番号 2）」，「現在の状況を考えると，将来の日本はよい方向に向かうと思う（項目番号 4）」などの楽観を表す項目群や，その反対方向の「国際情勢はこれからますます不安定になるだろう（項目番号 1）」，「一部の人々を除いて，一般庶民の生活はますます悪くなるばかりである（項目番号 3）」などの悲観を表す項目群に 2 分できる。

このように，当尺度のほとんどの項目が社会状況に対して評価を与えるものである。しかも自己の行動によって問題解決をはかるというような自我関与度のあまり入らない，単純な評価というべきものである。そこで，われわれはこの因子を『評価』と名づける。この因子は，社会という客体に対する評価態度を測定する尺度と考えられる。また，この因子は，社会に対する関係態

Table 4 評価尺度項目

Item No.	Original No.	Original Scale	Item	Factor Pattern EV	AL	PA	HE	SI	AD
＊1	72	Sヒ	国際情勢はこれからますます不安定になるだろう	**633**	134	−029	−204	−100	211
2	18	Sラ	現在の状況から考えて，これからの若者にとって未来は明るいと思う	**609**	−080	−006	016	199	−088
＊3	182	Sヒ	一部の人々を除いて，一般庶民の生活はますます悪くなるばかりである	**576**	−129	−040	−035	−129	090
4	33	Sラ	現在の状況を考えると，将来の日本はよい方向に向かうと思う	**565**	013	057	111	022	162
5	108	Sラ	将来の社会は今よりも理想社会に近づくと思う	**546**	−018	149	−004	035	089
6	138	ヘイ	将来，日本が国際紛争に巻きこまれることはほとんどないと思う	**541**	093	−100	−108	−050	040
7	82	Sラ	今日の社会状況では，自分の希望はだいたいかなえられると思う	**537**	−150	−121	124	219	−087
8	112	Sラ	今の社会は希望がもてるかなりましな社会だと思う	**514**	−153	037	171	−024	222
＊9	87	Sヒ	これからの世の中は，かえって昔より住みにくくなると思う	**510**	−115	148	028	−265	343
＊10	196	Sヒ	将来の政治の方向には希望がもてないと思う	**502**	−024	137	−208	−028	206
11	172	Sラ	今の社会は個人の能力が発揮できる社会だと思う	**446**	−125	023	035	133	035
12	48	ヘイ	今の国際状況では全面核戦争が起こる可能性はめったにないと思う	**445**	092	−167	053	166	−053
			Mean	**535**	−038	007	−002	015	097

度次元に，社会を客体として把える次元が存在することを示唆している。2次主成分分析の結果によれば，この評価因子は次に述べる疎外因子とともに2次の評価因子（Secondary Evaluation factor）を形成する。

(2) **疎外因子**（Alienation：AL）（15項目）

Table 2の準拠構造行列によると，この因子はペシミズム尺度に＋.417，個人無力感尺度に＋.398，一般的悲観尺度に＋.345，政治的疎隔尺度に＋.324，無力・疎外感尺度＋.319の正の負荷を示し，社会体制に対する楽観尺度に－.417の負の負荷を示している。

項目分析によって選ばれたTable 5の尺度項目を見ると，「日本の経済制度はやはり私たちに利益をもたらしていると思う（項目番号1，逆転項目）」，「将来はもっと人間性の尊重される社会に

Table 5 疎外尺度項目

Item No.	Original No.	Original Scale	Item	Factor Pattern EV	AL	PA	HE	SI	AD
＊1	97	SE	日本の経済制度はやはり私たちに利益をもたらしていると思う	−183	**582**	036	−299	029	−211
2	164	ヒP	役所の人々は企業の利益を優先して我々国民の要求にこたえてくれない	−180	**567**	162	097	313	−177
＊3	123	SE	将来はもっと人間性の尊重される社会になると思う	−215	**474**	005	−047	−090	−089
＊4	131	SE	結局，国民一人一人の票が国の政治を決定すると思う	−141	**463**	−329	−169	−014	−022
5	17	PW	個人の力では社会の矛盾を正すことはむずかしい	032	**459**	169	062	−160	269
6	149	ヒカ	役所や政治家の不正のニュースはもう聞きあきた	−218	**453**	−142	−070	357	001
7	84	ID	たくさんの人々が投票に行くのだから，自分一人ぐらい棄権してもかまわない	241	**441**	−121	159	−041	−104
＊8	52	SE	外国に比べて，税金は国民のためにまずまず有効に使われていると思う	−289	**438**	134	−257	−060	054
9	2	PW	国の政策決定に個人の影響力はあまり多くないと思う	144	**436**	−047	−010	−053	124
10	129	ID	我々は自分や自分たちの家族のことだけを考えていればよいと思う	336	**403**	−044	264	−126	−041
＊11	101	ID	今後，企業は次第に個人の意志を尊重していくようになるだろう	−066	**384**	047	077	−088	−089
12	47	ヒカ	社会は結局少数の権力者によって動かされていると思う	−317	**374**	013	049	098	003
13	137	AL	社会的に不幸な人がいても，私には同情するしか方法がない	240	**371**	−116	254	131	045
14	14	ヒカ	政治家の大半は，民衆の問題にあまり関心がない	−349	**364**	−042	−074	−104	082
15	32	PW	無力な個人は社会の中で自分の利益を守ることはむずかしい	−197	**324**	171	122	−093	187
			Mean	077	**435**	−007	011	007	002

なると思う(項目番号3，逆転項目)」，「外国に比べて，税金は国民のためにまずまず有効に使われていると思う（項目番号8，逆転項目)」などの逆転項目群は，経済制度は利益をもたらさず，将来は人間性の尊重される社会は到来せず，税金は国民のためには使われていないという，社会の諸機構が個人に対して疎外的であることを指す項目群である。さらに，「個人の力では社会の矛盾を正すことはむずかしい(項目番号5)」，「国の政策決定に個人の影響力はあまり多くないと思

う（項目番号9）」，「社会は結局少数の権力者によって動かされている（項目番号12）」に代表されるような個人効力（individual efficacy）の否定やSeemanのいう無力性（Powerlessness）を測定すると考えられる項目群がある。

以上の，社会の諸機構が個人に対して疎外的であるということと，個人の無力性という二面性を総合して考えると，この因子はまさに個人対社会の関係に生じる疎外感であるといえる。この個人対社会の関係に生じる疎外感は，様々な疎外態度の中でも典型的な疎外と考えられ，我々はこの因子を従来の用語にしたがって疎外（Alienation）と名づけることにした。

(3) **参加因子**（Participation：ＰＡ）（12項目）

Table 2の準拠構造行列によれば，この因子は集団参加肯定尺度に＋.556，個人参加の義務尺度

Table 6 参加尺度項目

Item No.	Original No.	Original Scale	Item	Factor Pattern EV	AL	PA	HE	SI	AD
1	124	Ｐコ	長い目でみて，住民運動をすることは大切であると思う	−123	−106	**710**	043	−054	229
＊2	69	Ｐヒ	社会運動の多くは波風をたてているのにすぎないと思う	001	034	**683**	−095	−182	128
3	34	Ｐコ	成功する見通しが少なくとも，住民運動は決して無駄ではない	125	008	**659**	126	170	−024
4	41	Ｐコ	私たちの民意が反映されれば，世の中の流れはかわると思う	056	049	**604**	191	099	−012
＊5	179	Ｐヒ	政治的にさわぐより自分の仕事に精をだした方がよい	−093	−101	**586**	−052	−152	−073
6	49	Ｐコ	住民運動によって住民一人一人の意志を政治に反映できると思う	191	−100	**539**	014	102	070
＊7	197	Ｐヒ	社会をよくしていこうとするいろいろの団体活動は，結局，あまり，その目的を果すことができないだろう	260	−022	**501**	−203	−111	056
8	26	Ｐコ	我々が努力を傾けることによって，世界平和の維持は可能となる	150	023	**484**	066	266	−105
＊9	9	Ｐヒ	現在の政治の方向を変えるための運動はわずらわしいばかりで実際にはあまり効果がないと思う	084	−035	**475**	035	−056	−101
10	181	ＪＵ	我々の意見は署名運動や集会を通じて国の政治に反映させなければいけない	−125	068	**458**	−035	172	112
11	176	Ｐコ	日本の政治は我々一人一人の努力によって少しずつは変わっていくものである	163	−328	**378**	124	198	−069
＊12	114	ＰＬ	いつ起こるかわからない核戦争の問題よりも今日明日の暮らしの方が大切である	−208	−102	**323**	−296	−150	141
			Ｍｅａｎ	040	−051	**533**	−007	025	029

に＋.357の正の負荷を持ち，一方，集団参加否定尺度に－.555，適合志向尺度に－.412の負の負荷を示す。

この尺度項目群は，内容的には2分される。まず，「長い目でみて，住民運動をすることは大切であると思う(項目番号1)」，「社会をよくしていこうとするいろいろの団体活動は，結局，あまりその目的を果たすことができないだろう(項目番号7，逆転項目)」，「我々の意見は署名運動や集会を通じて国の政治に反映させなければいけない（項目番号10)」などに示されるように住民運動・社会運動などの集団参加の効用（efficacy）やそれらによる社会改善の可能性の認容である。ここで注意すべきことは，この項目群は，住民運動や社会運動へ実際に参加する意図を問うものであると結論することは妥当ではないという事である。社会経験の豊富でない学生にとって，住民運動や社会運動は，一般的かつ抽象的な意味を換起するだろう。この項目群はそれらの運動の効用を問うものであると考える方が妥当である。この因子はEysenckのいう急進主義（radicalism)と相関を示すことはあっても，本質的には異なっていると考えられる。その根拠はこの尺度の別の項目群，Item №4，8，11，12（逆転）の内容を吟味することで示される。

この4項目の内容は，それぞれ，「私たちの民意が反映されれば，世の中の流れはかわると思う（項目番号4)」，「我々が努力を傾けることによって，世界平和の維持は可能となる（項目番号8)」，「日本の政治は我々一人一人の努力によって少しずつは変わっていくものである(項目番号11)」，「いつ起こるかわからない核戦争の問題よりも今日明日の暮らしの方が大切である(項目番号12，逆転項目)」であり，これらの項目に共通した内容は社会問題事象の統制可能性や「我々」，「私たち」といった一般化された集団参加の効用についての一般的知覚である。

このように，上述の2つの項目群は，表面上の内容はやや異なるが，互いに共通している特性があるのがわかる。すなわち，それは集団参加及び一般化された参加関与による社会事象の統制（control）可能性の知覚であると考えられる。われわれはこの因子の一般的性質から，この因子を参加（Paticipation）と名づけた。

この因子の解釈は［問題］で述べたRotter（1954）やSeeman（1959）の考えに負うところが大きい。それに関する詳しい説明は後述することにする。2次主成分分析を行った結果より，当該因子は，2次因子「外的統制－内的統制」の下位領域であると考えられる。

(4) **他律性因子**（Heteronomy：ＨＥ，14項目）

Table 2の準拠構造行列によると，この因子は，無規範の容認尺度に＋.552，消極的現実肯定尺度に＋.551，外的統制・他律的社会観尺度に＋.446，享楽志向尺度に＋.338の正の負荷を示している。またTable 7の尺度項目をみると，「時代とともに善悪の判断基準は変わっていくものである（項目番号1)」，「社会正義を貫くことは，凡人にとってかなりむずかしいものだと思う（項目番号5)」といった規範の混乱や拘束性のなさを容認する項目や，「世間によくない出来事が生じるのもやむをえないと思う（項目番号2)」，「国の発展のためには少数の人々が犠牲になるのは，

Table 7 他律性尺度項目

Item No.	Original No.	Original Scale	Item	Factor Pattern EV	AL	PA	HE	SI	AD
1	31	NO	時代とともに善悪の判断基準は変わっていくものである	−081	−143	343	**628**	−254	163
2	110	シヨ	世間によくない出来事が生じるのもやむをえないと思う	219	−049	−208	**589**	279	−318
3	166	シヨ	国の発展のためには少数の人々が犠牲になるのは現実としては止むをえないと思う	396	006	−307	**550**	337	−363
4	150	シヨ	社会の幸不幸はとうてい一般の人たちにはわかるものではないと思う	302	050	−207	**539**	384	−391
5	40	NO	社会正義を貫くことは,凡人にとってかなりむずかしいものだと思う	040	158	239	**527**	−042	076
6	85	EC	よい仕事につくためには，自分の能力を高くみせる必要がある	−011	006	166	**522**	−089	106
7	160	シヨ	少々の政治汚職は政治をおこなっていくうえでやむをえないと思う	309	−156	−247	**518**	096	−225
8	10	NO	道徳的なことばかり主張していたら事業に成功することはむずかしい	−072	060	141	**517**	−119	−044
9	70	EC	政治家になるためには,立候補者は初めから守れない公約もしなければならない	−147	−112	−040	**471**	−080	130
10	62	シヨ	社会問題のいくつかは、成り行きにまかせる以外に仕方のないものだと思う	235	111	−198	**432**	172	−172
11	121	シヨ	結局,理想社会なんて非現実的すぎるので,現在の状況の下でうまくやっていくことが大切である	166	106	−387	**424**	343	−234
12	60	シヨ	国と国との間でどうしても話し合いのつかない時は戦争も仕方がない	277	−128	−186	**402**	079	−242
13	175	EC	ときには誇大報道をしないとマスコミは利益をあげることはむずかしい	−166	019	−104	**385**	080	159
14	100	NO	正直一途では世の中を渡ってゆくのはむずかしい	−078	234	247	**328**	−297	163
			Mean	099	012	−053	**488**	064	−085

現実としてやむをえないと思う(項目番号3)」,「社会問題のいくつかは，成り行きにまかせる以外に仕方のないものだと思う(項目番号10)」,「国と国との間でどうしても話し合いのつかない時は戦争も仕方がない (項目番号12)」といった社会に生じる種々の問題に対して各項目の末尾の表現にあるように,『・・・やむをえない』,『・・・仕方がない』といった消極的な現実肯定や妥協を示す項目が多い。また，世間を渡っていくためには少々の社会悪となるような行為もしかたがないとか,「よい仕事につくためには，自分の能力を高くみせる必要がある (項目番号6)」,「道

徳的なことばかり主張していたら事業に成功することはむずかしい(項目番号８)」,「正直一途では世の中を渡ってゆくのはむずかしい（項目番号14)」といった項目もある。

これらを総合して考えると，この因子は社会規範の相対的混乱を容認し社会悪と妥協したり，消極的な肯定をする他律的な成り行きまかせの関与態度を測定する尺度と考えられる。そこで，こうした性格を概括してこの因子を他律性（Heteronomy）と名づけることにした。

この他律性因子は，２次因子「外的統制－内的統制」の外的統制方向に負荷する。

(5) **社会的統合**（Social Integration：ＳＩ，12項目）

Table 2 の準拠構造行列によると，この因子は，道徳性尺度に＋.547，主体的個人参加尺度

Table 8 社会的統合尺度項目

Item No.	Original No.	Original Scale	Item	Factor Pattern EV	AL	PA	HE	SI	AD
1	90	MO	義理人情はいつの世でも社会生活にとって欠くことのできないものだと思う	194	110	−258	036	**710**	−221
2	68	MO	人間の本性は基本的には協調心だと思う	311	073	−173	−076	**673**	−172
3	12	MO	近頃，家族間の意見の食い違いが大きくなっているのは悲しいことだ	091	266	−179	−147	**664**	−102
4	190	MO	私たちはともすると国家に権利のみ主張して国民としての義務を忘れがちである	078	053	−132	215	**616**	−137
5	66	IP	住みよい社会をつくるためには，私たち一人一人が努力していく覚悟をしなければならない	−172	−082	070	−044	**560**	062
6	156	ID	自分は社会をよくしていくために，積極的な努力をしていくつもりべある	−010	−222	137	−038	**485**	−232
7	81	IP	社会のために役立とうとすることは、我々一人一人の義務である	−154	−091	086	−072	**475**	194
8	200	IP	社会の現状が如何に悪くとも，自分は前向きに行動していきたい	−149	−061	−083	−096	**460**	016
9	21	IP	現代社会の危機をのりこえるためには，私たち一人一人が自ら行動しなければならない	−156	−071	227	014	**457**	−023
10	194	IP	皆と力を合わせて世の中をよくしてゆきたいと思う	−138	−018	095	−189	**456**	098
11	36	IP	社会の一員として，日本の現状と将来を真剣に考える必要がある	−235	−082	201	−054	**378**	169
12	171	IP	世の中には一人一人が努力して解決すべき問題がたくさんあると思う	−226	−036	165	−137	**347**	094
			Mean	−047	−013	013	−046	**523**	−021

に＋.316の正の負荷を示している。なおペシミズム尺度が＋.319のやや弱い正の負荷を示している。

さてTable 8の尺度項目をみてみよう。第1に，社会生活を営んでいく際の道徳性や社会成員としての義務の認識である項目，例えば「義理人情はいつの世でも社会生活にとって欠くことのできないものだと思う（項目番号1）」，「人間の本性は基本的には協調心だと思う（項目番号2）」，「私たちはともすると，国家に権利のみ主張して国民としての義務を忘れがちである（項目番号4）」などがある。第2に，項目番号5～12に共通してみられるように，個人一人一人の社会成員としての主体的な努力や義務を遂行していこうとする項目，例えば，「住みよい社会をつくるためには，私たち一人一人が努力していく覚悟をしなければならない（項目番号5）」，「自分は社会をよくしていくために，積極的な努力をしていくつもりである（項目番号6）」，「社会のために役立とうとすることは，我々一人一人の義務である（項目番号7）」などがある。当尺度はこの2群に分けることができるが，これらを総合して考えると，社会の最小単位である家族（項目番号3に『近頃，家族間の意見の食い違いが大きくなっているのは悲しいことだ』という記述がある。）から全体社会（Total Society）を含む社会の秩序を維持していくために必要な共通の規範（義理，道徳，義務）に従い個人の主体的な参加や努力を行っていこうとする志向を測定しており，いわば，社会を秩序だて社会全体をうまく運営していこうとする主体側の意志であり，われわれはこの因子を社会的統合と名づけることにした。

この社会的統合が次に述べる適合因子とともに，2次因子「適応」を形成する。

(6) **適合因子**（Adaptation：AD，12項目）

Table 2の準拠構造行列によると，この因子は主に適合尺度に＋.481，社会秩序の肯定尺度に＋.429の正の負荷を持ち，また現実主義尺度に＋.308とやや弱い正の負荷を持っている。実際に尺度項目の内容をみてみよう。

まず，「住みよい社会をつくるためには，結局，政治の力が大切であると思う（項目番号1）」，「社会生活を営む上で，事の善悪を判断する法律はやはり必要である（項目番号4）」，「日本の裁判は相当，公平な判決を下していると思う（項目番号9）」，「私たちは合理的で整った制度のもとで暮していると思う（項目番号7）」など，政治，法律，裁判などの制度への信頼と期待を表現した項目群がある。また，「戦争は国と国とがよく話し合ってどうしても避けなければならない（項目番号2）」，「万一のことがあっても，大丈夫なように貯蓄はしておいた方がよい」などの安全希求感や，さらに「外国に比べて，日本の社会は安定した社会である（項目番号3）」，「日本の社会は左右が対立しながらも全体としては融合した社会である（項目番号7）」，「今の社会は住みよい社会である（項目番号8）」などの一般化された社会に対する安定・融合・肯定感を表わす項目群がある。

これらの項目内容から，この因子は政治，法律などの社会制度や「社会そのもの」への信頼感

Table 9 適合尺度項目

Item No.	Original No.	Original Scale	Item	Factor Pattern EV	AL	PA	HE	SI	AD
1	71	AI	住みよい社会をつくるためには，結局，政治の力が大切であると思う	−240	−185	198	089	−256	**645**
2	195	AI	戦争は国と国とがよく話し合ってどうしても避けなければならない．	−367	159	111	−330	−035	**530**
3	61	OA	外国に比べて，日本の社会は安定した社会である	108	−021	044	074	−086	**520**
4	1	AI	社会生活を営む上で，事の善悪を判断する法律はやはり必要である	000	087	030	−105	001	**512**
5	151	AI	万一のことがあっても，大丈夫なように貯蓄はしておいた方がよいと思う	−225	021	−148	−117	114	**511**
6	153	OA	科学技術の進歩によって，私たちはたくさんの恩恵をうけるようになるだろう	053	−151	−085	−002	−081	**504**
7	88	OA	日本の社会は左右が対立しながらも，全体としては融合した社会である	024	007	−051	−029	−039	**499**
8	22	OA	今の社会は住みよい社会である	280	−061	−039	021	−112	**491**
9	157	OA	日本の裁判は相当，公平な判決を下していると思う	181	−184	−159	−033	−065	**394**
10	7	OA	私たちは合理的で整った制度のもとで暮らしていると思う	259	130	−097	−067	198	**383**
11	91	OA	今の社会がある程度、管理社会であるのは仕方のないことと思う	112	−109	−154	217	109	**364**
12	76	RE	極端な考え方の人々をのぞけば、大半の人々の意見は民主主義を保つことについて一致していると思う	−195	−294	−068	202	−059	**320**
			Mean	−001	−050	−035	−007	−026	**473**

とそれらによる安定•安全志向を測定していると考えられ，われわれはこの因子を適合（Adaptation）と呼ぶ。われわれが「適合」という一般的名称を採用した第一の理由は，この因子の意味するところが単なる社会への信頼だけでなく，個々人が，彼らの意志から独立した社会の下部的構造によって支えられ，かつ規制（regulation）されている関係において成立する心理状態（われわれは，この状態を適合状態と仮りに呼ぶ）を測定していると考えるからである。この個人を支持（support）し，かつ規制（regulation）するという現象は，「今の社会がある程度，管理社会であるのは仕方がないことと思う（項目番号11）」に読みとることができる。すなわち，「ある程度の管理社会」は個人を社会の秩序性に定位し，心理的安定を与えるが，一方，個人の側も管理社会で生きていくためのコスト（cost）を払わなければならない。学歴もこの二面性を持っているもので

あろう。例えばこの尺度では取りあげなかった「今の世の中では結局は学歴やお金がものをいうと思う」という項目は，この適合因子に，0.514という高い負荷を示し，かつ先述の疎外因子に0.372という負荷を持っている。この項目は，2つの因子に同時併行的に負荷する多義性を持っているので，尺度内にはふくめなかったが，この項目が，適合と疎外の2つの因子分散によって飽和されているという事は，学歴やお金のように疎外要因となるものでも，社会生活を営む際には保障的条件となるものがあることを物語っている。このことは，個人と社会の関係を論じる場合に，「疎外－非疎外」という単純な図式だけでなく，「適合－非適合」などの別次元を含めて説明されなければならないことを示唆する。この因子の本質は社会への単なる信頼だけでなく，個々人が社会に支持され，かつ規制されるという，矛盾的緊張に対する極めて深い人間学的理由を内包している。さらに2次主成分分析の結果より当該因子は先の社会的統合因子（Social Integration factor）と共に，二次因子「適応」を形成し，二次因子空間における，適合因子の機能的側面が示される。

以上の6因子に関して，12～15項目からなる合計77項目の6尺度が構成された。Table10には，構成尺度間相関，及び因子真実性係数（coefficient of factor-trueness）（辻岡 1964），共通性，因子的妥当性係数や内的整合性の評価指標であるCronbachのα係数が示されている。

これらの評価指標によれば，6因子尺度の因子的真実性や因子的妥当性，及び内的整合性に関してはほぼ満足した結果であるといえる。

Table 10 構成尺度間相関，因子真実性係数，因子妥当性係数，共通性，α係数

	EV	AL	PA	HE	SI	AD	Foctor Trueness	Factor Validity	Commu-nality	α Coefficient
評価(楽観－悲観) EV		−485	144	−060	012	329	981	914	869	852
疎外 AL	−485		−457	383	−282	−134	990	923	871	793
参加 PA	144	−457		−485	489	−042	987	943	913	836
他律性 HE	−060	383	−485		−230	192	982	914	865	786
社会的統合 SI	012	−282	489	−230		315	991	918	859	816
適合 AD	329	−134	−042	192	315		989	923	971	728

5．二次主成分分析の解釈

Table 3の因子間相関行列を視察してみると前述の一次6因子はかなり高い斜交度を呈している。この因子間相関の高さは一次因子得点間に共通変動があることを示している。これらをさらに詳細に検討するため，この因子間相関行列を主成分分析し，Varimax回転した結果から，社会・政治的態度の二次因子水準における機能的構造を次のTable 11によって検討した。

Table 11は3主成分解のVarimax回転後の直交因子負荷行列である。表のスペースを節約するため，横方向の各行が3主成分それぞれの因子負荷を示している。また，この階層構造図はFig. 1に示されている。

Table 11　2次バリマックス因子負荷行列

	評　価（楽観－悲観）	疎　外	参　加	他律性	社会的統　合	適　合
二次評価因子	**944**	**−517**	−134	−232	−144	209
外的統制－内的統制	−043	**638**	**−847**	**803**	**−449**	248
適　　応	024	−206	146	206	**836**	**891**

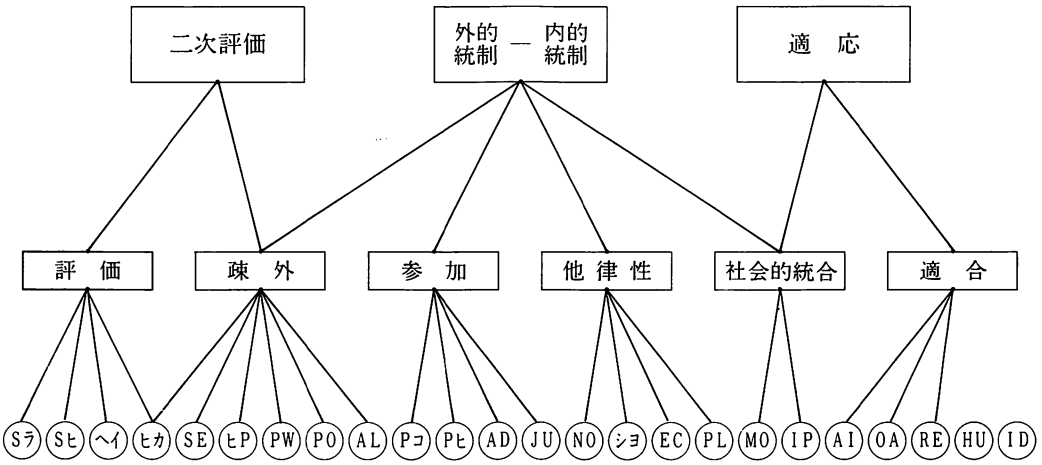

Fig. 1　社会・政治的態度の階層図

（Ⅰ）**2次評価因子**（Secondary Evaluation Factor：EV_2）

この二次因子は一次因子『評価』（EV：0.944）に極めて高い正の負荷を示し，『疎外』（AL：−0.517）に負の負荷を示している。1次因子『評価』に極めて高い負荷を持っているため，2次因子レベルでの評価因子であると考えられる。（＋）方向は楽観方向であり，『疎外』が負の方向に負荷していることからわかるように疎外は現象的には悲観方向である。

この結果からすれば，疎外の反対は単なる反疎外のみでもなく，一面脱疎外であり，しかもそれは疎外とは一次独立な「評価」でもあるといえる。換言すれば，一次独立な一次因子は，それぞれ独立な態度として存在しつつも，一方，相互には一次因子間相関に現れているような相互関

係を示している。しかもそれがより高次な二次因子空間においては，その対極性として，一部分は疎外と評価は対立しつつも，単なる反疎外としてではなく，非疎外，脱疎外としての評価の態度次元が併存しうる事を示しているのである。すなわち，自己自身の内部に矛盾や分裂といった緊張関係を含みながらも，それらの併存を容認する社会・政治的態度の存在可能な構造的枠組みが想定される態度モデルが定立されなければならないのである。われわれは，これを社会・政治的態度の「基本的三次モデル」(Basic three dimensional model of socio-political attitude) とよぶ。

(II) **外的統制－内的統制** (External Control-Internal Control：ＣＯ)

第IIの二次因子は Table 11に示されるように，一次因子『評価』を除く他の5因子に係わり，極めて広汎な一般因子的性格の強い因子であることがわかる。その中でも，『他律性（ＨＥ：0.803)，『疎外』（ＡＬ：0.638)に正の負荷を示し，『参加』（ＰＡ：－0.847)，『社会的統合』（ＳＩ：－0.449)に負の負荷を示している。この二次因子のプラス方向は，他律的で，社会から疎外され，不参加的で（参加しても社会は変わらないという一般的見込み）社会的統合への意志がないということを示し，これは Rotter のいう「外的統制」の状態である。一方，反対方向は「内的統制」と呼ぶにふさわしい。さらに付言すると，『適合』（ＡＤ：0.248）にも弱い正の負荷を示している。これは適合状態はやや外的統制の側に傾くことを意味している。

この結果からみる限り，Rotter の仮説はかなり広汎に検証されたことになっており，先の二次評価因子よりもこの二次因子が社会・政治的態度における最も重要な基本的次元であることを示している。

(III) **適応** (Adaptation：AD_2)

この二次因子は Table 11 の第3行に示されるように，『適合』(ＡＤ：0.891)，『社会的統合』(ＳＩ：0.836）にとくに高い正の負荷を示し，しかも『他律性』（ＨＥ：0.206）に弱い正の負荷と，『疎外』（ＡＬ：－0.206）に弱い負の負荷を示している。これらを解釈すると，適合的で，社会的統合の志向を持ち，弱く他律的であるが，疎外感がないということは，広義な意味で，現代社会への適応を意味しているといえる。そこで，この二次因子は適応と名づけられた。

1980年代後半における中流階級の出現にともなう日本国民の民意は，この二次因子に高く負荷していることが予想される。所謂生活保守主義とか新保守主義というのは，革新対保守という Eysenck 流のイデオロギーレベルでの対立概念ではなく，新しい社会・政治的態度次元の出現を意味している。そして，この次元の中に他律性や疎外の次元も強くはないが底流として伏流していることにも目を向けなければならないのである。いわば社会・政治的態度の同時併行的現象に注目しなければならないのである。換言すれば，この分析結果の中に現代社会における社会・政治的態度の多次元的な意味と機能における緊張関係と平衡関係をくみとらなければならないのであ

る。これが，われわれの「基本的三次元モデル」の提案である。

［考　　察］

(1) 全体的考察

以上の分析結果を全般的に考察するとき，従来主として社会学者によって取り扱われて来た，疎外やアノミーといった社会・政治的態度に対しても，心理学者が長年にわたって培って来た操作的方法の適用が不可能ではないことが示されている。就中，因子分析法と因子的真実性に基づく項目分析および延長因子分析法による因子の論理的妥当性の検討方法というわれわれの手法は，思弁的な方法を拠り所としていた研究領域に対しても新しい光を投ずることになるといえよう。

しかし，本研究によって明らかにされた社会・政治的態度の基本的三次元モデルが，社会・政治的態度について必要にして充分な中核概念となるためには，出発の基点となった200項目の意見項目が必要にして充分な数だけの，種々の社会・政治的意見を充分な密度と範囲において代表しており，かつ，これらの意見についての賛否の意見表明を求められた被験者（男女大学生）がある程度成熟した社会・政治的態度を内に保持していなければならないという条件が満されなければならない。そのためには，本研究によって構成された6尺度を，種々の被験者集団に施行した場合の尺度得点の分布（平均，標準偏差，歪度，尖度等）や，性差，階層差，年齢差，地域差などの人口動態学的な有意差によって検証することが求められる。また，これらを外的基準変数とした回帰分析や判別分析によって，本研究によって求められた一次因子や二次因子の機能がさらに明確にされなければならないと考える。この意味からすれば，少なくとも本研究の一次6因子尺度は集団別にも，個人別にも，社会・政治的態度の分布構造をわれわれに提供しうる良きツールであり，このような客観的用具が従来われわれの手に与えられていなかったといえるのである。

(2) 疎外感研究との関連

さきに述べた通り，Seemanによる疎外の研究は，以後の疎外感尺度の研究について多くの寄与を果してきた。しかし，その後の研究者によって設定された疎外感尺度は，項目数の制約から生ずる尺度の信頼性（reliability）や項目間の相互相関から見た尺度間構造，換言すれば尺度の因子的妥当性（factor validity），さらには構成された尺度の因子的真実性（factor-trueness）や論理的妥当性（logical validity）が考慮されていないという心理測定法上の幾多の弱点をかかえていた。本研究はその点からいえば，従来の測定法上の難点を大体において克服したものであるということができる。

しかし，一方，Seemanの挙げた疎外の5成分を，項目レベルからそのすべての系譜をたどりながら跡づけるという作業は未完成に終わっている。この点については大学生を被験者とした研究

だけでは不充分であるといえよう。しかし，本研究において見い出された重要な視点は，

① 疎外はその内部成分のみを凝視するだけでは疎外事象の全体的把握は可能ではない。疎外の典型的因子である疎外因子は，二次の「評価因子」の悲観側と「外的統制－内的統制因子」の外的統制方向に負荷するといった二面性を有すること。

② 疎外因子を含めたいわゆる広義の疎外は，外的統制的および悲観的態度空間に位置し，それらの対極である内的統制的および楽観的態度，換言すれば自己の主体的克服の中にその解決の道が存在すると考えられること。

③ 疎外を含む「個と社会の関係」を把えるには，疎外に代表される個と社会との対立関係によってだけではなく，適合・適応という個と社会の融合的関係をも含めて検討する必要があることである。

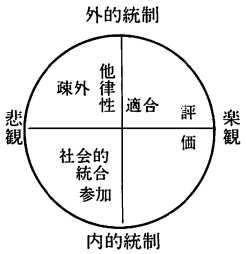

Fig.2 二次因子空間における評価と外的・内的統制面

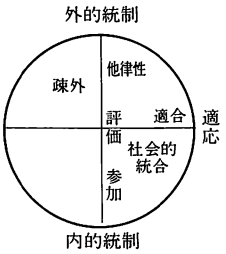

Fig.3 二次因子空間における適応と外的・内的統制面

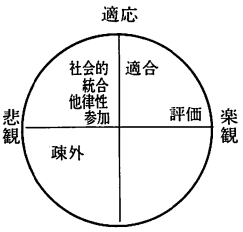

Fig.4 二次因子空間における評価と適応面

そもそも個と社会の関係は，単なる整合的な順接関係のみによって説明されるべきものではなく，逆接関係としてもこれを把えなおす必要があるということである。この場合，一つの概念は唯一の原因によって飽和されるという一義主義 (univocalism) によってではなく，多次元的な複数の原因相互の間に，順接と逆接とが同時併行する多義主義 (multivocalism) による説明が必要である。これらの視点を支える操作主義的方法が，われわれの用いた斜交因子分析法と延長因子分析法およびそれにつづく高次因子分析法 (higher-order factor analysis) である。例えば，Fig. 2は二次評価因子と外的統制－内的統制の高次因子軸上の6因子尺度の座標である。図によって視察可能なように二次評価の因子の楽観方向からみて，適合はやや楽観寄りであり，他律性はやや悲観寄りであり，疎外は非常に悲観寄りである。社会的統合といえども，社会状況に対する悲観的反省があって初めて成立するものであることをこの図はさし示している。

このように2つの軸上の平面に分布する社会・政治的態度尺度について見ると，個々の社会・政治的態度はこの平面に投射された位置を持ち，さらにこの平面に直交する「適応」軸に対して，社会的統合と適合は上方に突出し，疎外は下方へ沈み，他律性と参加は上方へややうかび上がってくる構造を示している。さらに，この基本的三次元空間すなわち球内の空間全体に様々な社会・

政治的態度の存在が可能であるはずである。われわれの収集した態度項目がその全てをカバーしているのか，密度の濃淡がないのかの検討も将来に残されている。現時点でいえることは，このような社会・政治的意見項目は，現社会状況の反映であるから，新規の項目も現社会に準じて構成されなければならないわけである。特に1980年代後半における日本の新しい社会・政治的状況に対しては態度項目を新しく書き加えることも必要となり，新しい社会・政治的態度次元が出現する可能性もあると考えられる。

(3) 基本的三次元における個と社会の関係仮説

次に，疎外を含む広範な社会•政治的態度に関する「基本的三次元モデル」から導かれる，「個と社会の関係」に関する仮説を提起しておくことにする。

われわれの基本的三次元モデルは直交解に基づくものであるから，「評価」,「外的統制－内的統制」,「適応」の基本的三概念は，社会・政治的態度を記述するための最少数の質的に異なった基本的変数であると考えてよい。これに対して斜交の一次因子解は相互に機能的連関を示す機能構造モデルである。

さて，「評価」,「外的統制－内的統制」,「適応」の直交三次元からは「個人にとって社会とは評価の対象として客体的存在であり，統制するか（内的統制）統制されるか（外的統制）と言う対立的対象であり，また，適応という融合的対象である」とする記述的仮説を得ることができる。この記述的仮説は「個と社会の関係」についてのより深い根本的な社会学的検討や本論で述べられる心理測定的検討が今後さらに必要である。

(4) 従来の社会的態度間構造研究との関連

Thorstone や Eysenck による社会的態度の研究においては，保守対革新主義の対極性因子（bipolar-factor）が社会的態度因子の一般因子として強力に機能しているという説は多くの研究者によって認められている。しかし本研究における社会・政治的態度の因子分析の結果によれば上述のような一般因子としての保守対革新主義のイデオロギー因子は出現せず，より内容的に豊富な1次6因子が抽出され，それら一次6因子間の構造も，評価，外的内的統制，適応の二次3因子を枠組みとするものであった。そしてその中でも Rotter のいう外的統制－内的統制の因子が，これらの一次因子を支配する一般因子であることが示された。この社会・政治的状況はまさに“イデオロギーの終焉”を示すものであろうか。筆者はそのような大胆な結論に至るにはまだまだ多くの検討が残されていると考える。そのため先ず手初めに，従来の所謂保守・革新尺度との相関関係について検討すると同時に従来の保守・革新尺度の内容の再吟味が必要であると考える。この方法としては態度内構造の研究を辻岡らによる一連の交叉断面的（Cross-sectional）および（Cross-modal）方法（辻岡・清水・柴田1979，辻岡・柴田1983，柴田・辻岡1983，柴田・辻岡1984）を用いて行う必要性が痛感される。これらの問題も将来に残されている。

さて，本研究で得られた1次6因子や2次3因子のそれぞれが，従来の態度間構造研究で得られた諸因子とは論理的に異なったものが得られたと考えられ，われわれは基本的三次元をふくめ

て今回の分析でえられた各因子が如何なるパーソナリティ特性と関連するかを検討するために，ＹＧ性格検査や価値観検査などとの交叉相面的研究を行うことを計画している。また，本研究の尺度は社会的望ましさ（social desirability）の影響が及んでいることが予想され，辻岡・藤村（1975）の行ったように社会的望ましさを操作的に取り扱う研究が望まれる。本尺度の場合，社会的望ましさの因子は検査施行上の妨害因子ではなく，よりダイナミックな「個と社会の関係」を見い出す上で重要な因子であると考えられる。フロムによると，「人間というものは，社会的条件に適応するうちに，かれがしなければならないことを，したいと欲するようになるような特性を発達させる」（E．フロム，日高六郎訳『自由からの逃走』）という。すなわち社会を維持するために，社会的に望ましいとされる外的な要請を内面化させることが適応の条件であると考えられ，この仮説は「適応」因子に１次因子である適合と社会的統合が高く負荷する事実と一致し，社会的統合因子が社会的望ましさの影響を受けることは充分予想できる。一般に社会的に望ましい行動をとろうとする個人は適応状態にあると考えられるから，社会的望ましさ因子の関与は必ずしも妨害的ではなく，むしろ一種の適応機能を果たしていることが予想される。この社会的望ましさの問題を含めて種々の検討がなされた後に，「個と社会の関係」を把えるための社会・政治的態度の機能と構造が操作的に解明されたといえるだろう。特にこの分野の研究視点には，社会学者の援助や示唆が待望される所である。

［ 要　　約 ］

１．従来の疎外・アノミーに関する社会学的研究を参照しつつ200項目からなる社会・政治的態度についての意見項目が作成され，288名の男女大学生に５件法による賛否の評点が求められ，200×200 の項目評定得点間の積率相関行列が求められた。

２．上記相関行列の二段階の主成分分析から，24個の内的整合性の高い習性水準の社会・政治的態度尺度が構成された。

３．上記習性水準尺度間の相関行列（24×24）が主因子法により因子分析され一次因子６因子が抽出された。それらは評価，疎外，参加，他律性，社会的統合および適合の６因子である。

４．延長因子分析法により，これら６個の一次因子に対する項目変量の因子パタン値が求められ，因子的真実性の原理にもとづく項目分析により，６因子尺度が構成された。構成尺度の因子的真実性係数は0.981～0.991の範囲で高く，尺度の内的整合性の測度であるα係数も満足すべき水準であった。

５．一次因子間相関行列の二次因子分析によって「二次評価因子」，「外的統制－内的統制因子」，および「適応因子」の二次３因子からなる社会・政治的態度の“基本的三次元モデル”が提案された。そのなかで，外的統制－内的統制因子がとくに重要な機能をもつ一般因子である。

6．本尺度を用いた交叉断面的，交叉相面的研究など，将来の研究課題が述べられた。

7．今後の社会・政治的態度の研究には，社会学者からの示唆が待望される。

[参 考 文 献]

Allport, G. W. 1935 Attitude. In C. Muchison (ed.) *A handbook of Social psyohology*. Worcester, Mass.: Clark University Press 798－844.

Cartwright, D. S. 1965 A Misapplication of Factor Analysis. *American Sociological Review*, **30**, 249－251

Cattell, R. B. & Tsujioka, B. 1964 The importance of factor-trueness and validity versus homogeneity and orthogonality, in test scales. *Educational Psychological Measurement*, **24**, 3－30

Cronbach, L. J. 1951 Coefficient alpha and the internal structure of tests. *Psychometrika*, **16**, 297－334

Dean, D. G. 1961 Alienation: Its Meaning and Measurement. *American Sociological Review*, **26**, 753－758

Fromm, E., 1941 *Escape from Freedom*, 日高六郎（訳）1965 自由からの逃走 東京創元社

早川昌範 1975 「政治的関心」に関する因子分析的研究 愛知学院大学文学部紀要，**5**，35-41

堀江 湛 富田信男 上條末夫 編著 1980 政治心理学 北樹出版

Krech, D., Cruchfield, R. S. & Ballachey, E. L. 1962 *Individual in society.* New York: Mc Graw-Hill

水口禮治 1985a 人格構造の認知心理学的研究 風間書房

水口禮治 1985b 無気力からの脱出 福村出版

宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究，**29**，11－18

Neal, A. G. & Rettig, S. 1963 Dimensions of Alienation Among Mannual and Non-Mannual Workers. *American Sociological Review*, **32**, 599－608

Neal, A. G. & Rettig, S. 1967 On the Multidimensionality of Alienation. *American Sociological Review*, **32** 54－64

Nettler, G. 1957 A Measure of Alienation. *American Sociological Review*, **22**, 670－677

Nisbet, R. A. 1953 *The Quest for Community*, New York Oxford University Press

Ray, J. J. 1982 Toward a definitive alienation scale. *Journal of Psychology*, **112**, 67－70

Rosenberg, M. J. & Hovland, C .I. 1960 Cognitive, affective, and behavioral components of attitudes. In M. J. Rosenberg et al. (eds), *Attitude organization and change: An analysis of consistency among attitude components*. New Heven: Yale University Press, 1－14

Rotter, J. B. 1954 *Social learning and clinical psychology*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice－Hall

生命保険文化センター・野村総合研究所 1980 日本人の生活価値観—将来社会展望のために—東洋経済新報社

斉藤正二 編著 1982 疎外論 多賀出版

Seeman, M. 1959 On the Meaning of Alienation. *American Sociological Review*, **24**, 783－791

Seeman, M. 1975 Alienation Studies. *Annual Review of Sociology*, **1**, 92

Srole, L. 1956 Social Integration and Certain Corollaries. *American Sociological Review*, **21**, 709－716

Struening, E. L. & Richardson , A. H. 1965 A Factor Analytic Exploration of the Alienation, Anomia and Authoritarianism Domain. *American Sociological Review*, **30**, 768－776

柴田 満・辻岡美延 1983 確認的因子分析のための総合確認システムII — Factormax 型解法と総合評価システム — 関西大学社会学部紀要，**15**(1)，145－186

柴田 満・辻岡美延 1984 確認的因子分析における因子的不変性の評価 関西大学社会学部紀要，**16**(1)，91－132

竹内 啓 1985 無邪気で危険なエリートたち 技術合理性と国家 岩波書店

田崎醇之助・吉川栄一 1975 疎外感 大日本図書

大城藤吉・三島倫八 1970 疎外現象の心理学的研究 その(1) 価値観との関連において 日本心理学会大会発表論文集 **35** 523－526

辻岡美延　1964　テスト尺度構成における新しい原理 — 因子的真実性 — 心理学評論，**8**，82－90
辻岡美延・東村高良　1975　因子分析における因子数の決定 — Scree　基準の客観化のためのコンピュータプログラム — 関西大学社会学部紀要，**6**(1)，35－45
辻岡美延・藤村和久　1975　質問紙法性格検査における社会的望ましさの因子について　教育心理学研究，**23**，1－9
辻岡美延・清水和秋　1975a　因子真実性による項目分析 — 社会的態度測定における一結果 — 関西大学社会学部紀要，**6**(1)，67－82
辻岡美延・清水和秋　1975b　項目分析による項目統計量と構成尺度の統計量 — 因子的真実性係数と因子的妥当性 — 関西大学社会学部紀要，**7**(1)，107－120
辻岡美延・清水和秋・柴田　満　1979　確認的因子分析による構成概念の不変性と普遍性 — 一般　Factormax 法による比較構造計質学への提案 — 関西大学社会学部紀要，**19**(2)，101－146
辻岡美延・柴田　満　1983　確認的因子分析のための総合確認システム — Patternmax 型解法と総合評価システム — 関西大学社会学部紀要，**14**(2)，149－179
安田三郎・原　純輔　1982　社会調査ハンドブック　有斐閣